

黒毛和種育成牛で認められた好酸球性皮膚炎の一症例

北薩家畜保健衛生所, ¹⁾鹿児島中央家畜保健衛生所
津留駿, ¹⁾島真理子, 是枝輝紀, 藤岡舞, 安田研, 瀬戸口浩二

【緒言】牛の皮膚病は、感染性のものとして皮膚糸状菌症や疥癬等がよく知られ、近年では国内で初めてランピースキン病が発生し、大きな問題となった。また、非感染性のものとしては、腫瘍やアレルギーによるものが知られている。好酸球性皮膚炎は、アレルギーに関連した皮膚炎の一つと考えられており、皮膚病変部の好酸球浸潤を特徴とするが、牛での報告は少ない。今回、管内で皮膚異常を呈した黒毛和種育成牛に遭遇し、病性鑑定の結果、好酸球性皮膚炎と診断したので、その概要を報告する。

【発生状況】黒毛和種繁殖牛 33 頭を飼養する農場において、2025 年 5 月初旬、13 か月齢の育成牛 1 頭に臀部及び背側部皮膚の肥厚、結節、発熱及び食欲低下が認められた。背側部には搔痒による擦過傷と出血も確認された。ステロイド剤やアレルギー用薬等による治療に反応がなかったため、診療獣医師からの依頼があり 5 月 28 日に農場立入り及び採血を実施した。臨床検査でランピースキン病を否定したが、皮膚病変の原因は不明であった。その後、症状は一時軽快したもの、結節が頸部や肩部まで拡大し、削瘦もみられたため予後不良と判断、7 月 15 日に鑑定殺を実施し、病性鑑定に供した。本農場のその他の飼養牛に異常は認められなかった。

【材料と方法】細菌学的検査では、主要臓器について分離培養を行った。病理組織学的検査では、主要臓器及び皮膚病変（左肩部、左腋窩部、腹部、左臍部、右大腿内側部、左大腿外側部）からパラフィン切片を作製し、HE 染色を実施した。皮膚については、トルイジンブルー染色等の特殊染色を実施した。生化学的検査では血清生化学検査を行った。ウイルス学的検査では、5 月 28 日及び 7 月 15 日に採取した血清を用いて牛伝染性リンパ腫抗体検査を実施した。8 月 18 日には再度農場へ立入り、飼養衛生管理、飼料及び薬剤使用状況を調査した。

【結果】本症例では、頭部と四肢遠位部を除く全身の皮膚に、2~10 cm 大の円形または不整形の多数の結節が認められた。病理組織学的検査では、真皮に好酸球の浸潤及び水腫が認められ、特に腹部や右大腿内側部では血管新生を伴う好酸球の顕著な浸潤がみられた。病変部にはトルイジンブルー染色で異染性顆粒を有する肥満細胞が観察された。主要臓器から病原細菌は分離されず、血清生化学的検査で著変は認められなかった。また、牛伝染性リンパ腫抗体は陰性であった。農場調査の結果、防虫ネットの設置、牛舎敷料の定期的交換及び IGR 剤の散布等により吸血昆虫は少なく、給与飼料、ワクチンプログラム、治療薬も一般的な内容であった。

【考察】病性鑑定の結果、本症例は好酸球性皮膚炎と診断された。臨床症状や検査結果からアレルギーの関与が疑われたが、発症に関与した原因物質の特定には至らなかった。本症例の臨床症状は、一見するとランピースキン病に類似しており、牛の皮膚疾患の類症鑑別の 1 つとして重要なと考える。牛の好酸球性皮膚炎に関する報告は少ないとから、本症例で得られた臨床的、病理学的特徴を整理し、症例の蓄積と農場関係者や獣医師への周知を図りたい。